

大本教と道院・紅卍字会との提携

——宗教連合運動に内包された政治的含意——

佐々 充 昭

はじめに

大本教は、明治二五（一八九二）年に開祖・出口なおに「良の金神^{うしろ}＝国祖・国常立尊^{くにとだちのみこと}」が神懸かり「三千世界の立替え立直し」を宣言したことに始まる。その後、独自の神道修行によって霊能カリスマを獲得した出口王仁三郎^{おにさぶろう}を後継者に迎えて、大正期以降大きく教勢を拡大した^①。しかし、「大正維新」による「世の立て替え、立て直し」という排外的なスローガンを掲げて煽動的な布教活動を行ったために、当局から危険視され、大正一〇（一九二一）年に教団幹部が不敬罪などで逮捕される事件が起こった（第一次大本事件）。この難局に際して、出口王仁三郎は排他的な教団イメージを払拭するために、新たな国際化戦略に打って出た。一九二三年九月に海外宣伝部を設けて海外布教積極化の方針を固め、世界共通語として当時話題を呼んでいた 에스ペラント を採用しながら海外各地に支部を設置していった。

さらに大本教は、「人類愛善」と「万教同根」というスローガンを掲げながら、世界各地の諸宗教団体と積極的な交流を行った。一九二三年にバハイ教（一九世紀後半にイランで創始されたイスラム系新宗教）のアメリカ信徒を大本教本部に招いて交流したのを皮切りに、普天教（朝鮮）、白色連盟（ブルガリア）、白色旗団（米国・ドイツ）、全露新神霊協会（ロシア）

の他、中国においては、道院・世界紅卍字会（以下、紅卍字会と略称する）、悟善社（救世新教）、在理会、回回教（イスラム教）、喇嘛教などの団体と交流を深め、その中には相互の布教活動を協力し合う提携関係をもつに至った教団もあった。大本教が行ったこれら海外諸宗教との交流・提携は、概して表面的で形式的なものであった。しかし、その中であって道院・紅卍字会との関係は、単なる「提携」の次元を超えて、両者一体的な「合同」と言えるような深い関係にまで発展した。

両教団の提携に関しては、大本教の対外宣教活動に重要な影響を与えたこともあり、大本教の教団史の中でその経緯が詳細に記されている。最近はまだ、道院・紅卍字会の研究が進展する中で、特に孫江によって詳細な研究がなされている^②。本稿ではこれらの研究成果を踏まえながら、両教団が「合同」とまで言えるような親密な関係をもつに至った理由について明らかにしてみたい。

一．道院・紅卍字会の創設経緯と教義の特色

道院・紅卍字会とは如何なる団体であったのか。ここではまず、その創設の経緯と教義の特色について述べておきたい^③。道院の始まりは、民国五（一九一六）年頃に中国山東省の濱県という一小都市で、県長をつとめていた呉福林と駐防營長の劉紹基が、同県公署内の一角にある祠に参

詣し、壇を設けて「扶乩」と呼ばれる中国古来の占法によって諸事を伺っていたことに端を発する。この占壇にはおもに尚仙と呼ばれる唐代の神仙が降臨したが、その他にもさまざまな神霊諸仏が臨んで神示を与えた。やがてこの壇には太乙老人（至聖先天老祖）という宇宙の至高神が降りるようになり、『太乙北極真經』などの經典が伝授された。その後、この結社は「道院」と名付けられ、一般人の入会も許可された。入会者は「修方」と称され、「道名（一種のイニシエーション名）」が授けられた。こうして民国一〇（一九二二）年旧曆二月九日に濟南道院が正式に開設された。さらに翌一九二二年一月には「道院院章十二條」を規定し、北京政府の内務部に提出して正式な批准を得、公認結社としての活動を開始した。

道院の最大の特徴は、教理や教団の組織形成に至るまで、すべての事項を扶乩にもとづいて決定する点にあった。扶乩とは一種の神懸かりによる自働書記術であり、その方法は次の通りである。まず、乩筆（T字型の木製棒）の両端を二人で持ち、その木筆の下に砂を盛った沙盤を置く。乩筆を支持する者は纂方と呼ばれる。纂方の精神統一によってやがて神霊が下り、乩筆が自然に動き出し、沙盤の上に文字が次々と記される。これらの文字を宣方と呼ばれる者が判読し、録方と呼ばれる者がこれを記録する。道院では、このようにして示された訓文を「壇訓（あるいは乩訓）」と称し、神仙諸仏聖賢によって示された神示と見なして、その指示に絶対的に従った。

道院の特徴として次にあげられるのは「五教合一」の教義である。道院では、宇宙の根源的至高神を「至聖先天老祖（老祖」と略称する）」と称し、さらにその実体を「先天之一炁（根源的な一つの気胞）」とみなした。そして世界中のあらゆる宗教は、すべて老祖の命を受けて出現したものであり、時代や民族などの要因・条件によって違いが生じただけで本来は一なるものであると理解された。このような考えから、特に仏教・

道教・儒教・キリスト教・イスラム教の五つの宗教は本質において同一であるとし、老祖の他に五教の教主（仏教の釈迦、道教の老子、儒教の項先師（孔子の師）、キリスト教のイエス、イスラム教のムハンマド）を等しく信仰対象と見なした。

また、道院の特徴として、信仰と慈善事業の並行が説かれたことがあげられる。道院では、慈善行為の伴わない信仰は真の信仰ではなく、信仰を伴わない慈善行為は真の慈善ではないとして、これを「内修外慈」あるいは「道慈（修道と慈行）」と称した。そして、内修（内的修道）のための方として「先天の坐法」という修養法が行われた。一方、外慈（対外的な慈善行為）については、道院設立の翌年である一九二二年一月に世界紅卍字会が創設された。道院と紅卍字会との関係は「内修外慈」の教義にもとづいて、道院が内的な信仰修養を行う団体であるのに対して、紅卍字会は外的な慈善活動を実践する団体として、互いに切り離すことの出来ない表裏一体の組織であるとされた。

道院・紅卍字会は、扶乩という民間信仰の基盤の上に、世界五大宗教のエッセンスを織り交ぜながら、中国の伝統的な道徳倫理を説き、当時、社会的混乱状態にあった中国人の心を大きくとらえ、短期間で急成長を遂げていった。また、天災被害者の救護、窮民に対する食糧品の供給、施療施薬、貧民子弟の教育、失業者救済、傷兵避難民の救護、戦没者の埋葬など、多種多様な慈善活動を実践した紅卍字会は、辛亥革命後、大小の戦乱の絶えなかった中国社会において大きな役割を果たした。道院創立後、一年を待たずして六〇余ヶ所にのぼる道院が相次いで設立され、やがて中国の二三省、合計四百ヶ所以上にのぼる道院が設立されるまでに至った。そして中国全道院を統括する本部として一九二四年に北京に「総院」が開設され、地方の重要都市には一地方の道院を統括する「主院」が設置された。こうして最盛期には道院の修方数は三〇万ともいわ

れるほど急速な発展を遂げていった。

二、中国内における道院・紅卍字会の発展

道院・紅卍字会が急成長を遂げた理由の一つとして、中国各界の実力者が多数入会したことがあげられる。一例をあげると、道院では、初代統掌（総責任者を指す）の杜默靖が一九二三年二月に他界した後、徐世光（道名・素一）が濟南道院の統掌に任命された。徐世光は、一九一八年に第四代中華民国大總統に就任した徐世昌の実弟であった。また、紅卍字会の初代会長には、北京政府の内務総長や代理国務総理などをつとめた錢能訓（道名・玄機）が就任している。その他にも、学界・政界・軍閥・財界各方面の著名人士らがこぞって道院・紅卍字会に入会した。大本信者の北村隆光が行った報告には、以下のような人物が道院・紅卍字会に入会していたとされる。すなわち、北京政府の国務総理兼財政総長をつとめた熊希齡、国民党理事や北京政府僑務局総裁をつとめた王芝祥（後に紅卍字会中華總會会長となる）、武昌革命の八大功臣として国民党理事をつとめた王人文、張作霖派の軍人として東北陸軍整理処顧問をつとめた許蘭洲、袁世凱の腹心として大典籌備処委員をつとめた江朝宗、浙江軍務善後督弁などをつとめた軍人の盧永祥、浙江省寧台鎮守使をつとめた何豊林、直隸派の有力指導者の一人であった呉佩孚、直隸派に属して湖北督軍をつとめた蕭耀南、清末・民初に海軍提督として活躍した薩鎮冰、孔子の第七代孫で教育家として活躍した孔祥榕など、錚々たる人士が道院・紅卍字会に入会していた。ただし、道院にしても紅卍字会にしても、表向きには修養慈善団体であることが強調され、政治には一切関与しないことが謳われていた。¹¹⁾しかし、これほどの有力人士たちが多数加入していたために、中国における政治状況の影響を自然と受けるように

なっていた。

周知の通り、道院・紅卍字会が登場した一九二〇年代の中国では、北京政府のほかにも、南部に勢力基盤をおいた国民党政府と各地に割拠した地方軍閥とが拮抗し、互いに対立を深めていた。このような時代状況の中で、道院・紅卍字会の教勢は北部と南部で大きな違いを見せた。特に一九二七年南京に国民政府が樹立されると、北伐によって翌一九二八年に北京政府を打倒し、中国全体を代表する唯一の中央政府となった。その際、国民党の主導権を握った蒋介石は、伝統的な民衆信仰を非科学的な遺物とみなし、各種の新興宗教団体を淫祀邪教として肅正する政策をとった。実際、一九二八年一〇月に国民政府の内政部によって道院・同善社・悟善社などを「迷信機関」とする取締令が通達された。これによって道院は正式な宗教団体とは認められず、その外郭団体である紅卍字会の慈善活動だけが許可された。¹²⁾さらに中国の南方では、上海を中心として新文化運動が展開された。特に雑誌『新青年』に参集した知識人たちは民主と科学を旗印に掲げ、清末以来、扶乩を利用して登場してきた盛徳壇靈学会や同善社などの団体に対して、その非科学性を厳しく批判する運動を展開した。¹³⁾このような情勢下で、中国南方地域における道院・紅卍字会の教勢はあまり振るわなかった。¹⁴⁾

その一方で、華北および東北地方における道院は急速な勢いで拡大した。当時の中国北部の状況をみてみると、直隸派と奉天派の対立による第一次奉直戦争（一九二二年）と第二次奉直戦争（一九二四年）を経て、一九二〇年代半ば以降、東北軍閥の張作霖が北京政府の実権を掌握した。このような状況の中で、東北地方における道院の発展は特に目覚ましいものがあつた。これに関して、戦前期に満州の建国大学で教授をつとめた大山彦一は、東北地方における道院の勢力拡大理由について次のような報告をしている。すなわち、東北地方を掌握していた軍閥・張作霖の

腹心の中に談国桓なる人物がいた。彼は当時、張作霖の秘書長をつとめ要職を歴任したが、やがて道院・紅卍字会に入会し、篤実な信者となった。談国桓（道名：道桓）は道院の勢力拡大を図るために、張作霖と張学良の父子を説得して道院に帰依せしめた。こうして張父子の支援のもと、談国桓を統掌として一九二二年六月奉天に瀋陽道院が設立された。瀋陽道院は東北地方における道院活動の中核的な役割を果たし、翌年には東北地方所在の道院数が三〇余ヶ所に達した。

さらに、張作霖（道名：敬修）の華北進出を契機として、談国桓は張作霖と中国全道院の中心であった北京総院との間により密接な関係をもたせた。一方、張作霖自身も、華北地方における勢力基盤を固めるために道院・紅卍字会の力を利用しようとした。談国桓は瀋陽道院の統掌と同時に北京の紅卍字会中華総会の副会長を兼任し、また張作霖の大元帥府侍従武官長をつとめた許蘭洲（道名：憲輝）が紅卍字会中華総会長をつとめた。その他、当時、北京総院の統掌をつとめていた熊希齡（道名：妙道）は、北京政府の元國務総理にして晩年に張作霖と親密なる関係をもつた人物であった。

こうして東北地方の道院・紅卍字会では、張政権に関係する有力者が多数占めることとなった。大山彦一の報告によると、東北軍閥の陸軍將校として活躍した張海鵬や、四洮鉄道督辦の馬龍光、北京政府で中華民國陸軍総長に就任した張惠景、惠華銀行総經理の董樹棠、興業公司經理の溥夢岩、東辺実業銀行長の王性真の他、鐵路公安局長、儲蓄銀行長、政記公司總經理、懷徳県商務会長、中国銀行支店長、吉林社会事業聯合会長、熱河全省商務総會長などが入会し、道院・紅卍字会は張政権の支柱一機関の様相を呈するようになったと報告されている¹⁵。その後、東北軍は一九二八年に起こった南京国民政府の北伐によって北京を追われた。しかし、先に述べたように、南京の国民政府は扶乩による民間信仰

団体に対して取締令を出したために、道院・紅卍字会の勢力はむしろ東北地方で拡大していった。このことは、北伐後から満州事変までの時期に、中国全土に設立された全道院の約半数が東北地方に集中していることから確認できる¹⁶。このようにして、一九三一年に満州事変が起こった頃は、東北地方において道院・紅卍字会が一大宗教勢力に成長していたのである。

三、大本教と道院・紅卍字会との提携

道院・紅卍字会の活動に関しては、日本でも大きな関心が寄せられた。それは、紅卍字会の慈善活動が国境を越えたものであり、日本で起こった災害に対しても救援の手が差し伸べられたからである。日本側の報告によると、関東大震災（一九三三年）では米二十石と金二万元、北丹地方震災（一九二七年）では金五千元、三陸地方震災（一九三三年）では金二万元、函館火災（一九三三年）では金一万元、関西風水害（一九三三年）では金一万元、台湾震災（一九三五年）では金五千元、伊豆震災（一九三五年）では金五千元が、紅卍字会から日本側へ災害復興のために寄附されたとされる¹⁸。当時の中国では、一九一五年の対華二十一カ条要求によって反日感情が噴出し、北伐によって政権を掌握した蒋介石の国民政府も民族主義を掲げて排日を訴え、さらに満州事変を契機として中国全土で抗日運動が高揚していた。このような時代状況の中で、中国人から無償の慈善活動や義捐金寄附の手が差し伸べられたことは、日本において大きな驚嘆の的となった。

また、道院・紅卍字会に中国各界を代表する実力者が多数入会していたのも、日本側の大きな関心の的となった。大本教の出口王仁三郎が道院・紅卍字会と積極的に提携関係を結ぼうとした理由も、まさにこの点

にあったと考えられる。とりわけ中国大陸への教団進出を目指していた出口王仁三郎にとって、道院・紅卍字会に親日派の有力人士が多数入会しており^⑩、特に中国東北地方を中心に一大勢力を形成していた点が大きな魅力であったと考えられる。以下ではまず、両団体が提携に至った経緯について述べておこう。

大本教と道院・紅卍字会との交流は、一九二三年九月に関東大震災が起こった際、紅卍字会側が老祖の神示を受けて、日本へ慰問使節員を派遣した時から始まった。一九二三年一月、紅卍字会中華総会は三人の使節を日本に派遣し、米二〇〇〇石と五〇〇〇ドルを送った。この時、使節員の一人であった侯延爽（道名・素爽）は、中国を出発する前に、在南京日本領事館の書記官であり大本教の信者でもあった林出賢次郎から大本教の紹介を受けていた^⑪。侯延爽は、清末に日本の法政大学に留学した経験があり、中国銀行のハルビン支店長や税関長などを歴任した人物であった^⑫。侯延爽ら一行は日本へ渡って東京で震災慰問の仕事を終えた後、綾部にある大本教本部に立ち寄って出口王仁三郎と面会した。彼らは大いに意気投合し、道院の教えと大本教の教理が根本的に同じであることに同意した。これがきっかけとなり、大本教きつての中国通で中国語に堪能であった北村隆光が中国へ派遣され、済南母院にて道院・紅卍字会に入会した。その後、北村隆光（道名・尋宗）が橋渡し役となって、翌一九二四年三月に神戸に日本最初の道院（神戸道院）が開設された。その際、扶乩による老祖の命によって、出口王仁三郎に「尋仁」という道名が授けられ、神戸道院の責任統掌の職命が与えられた^⑬。ちなみに統掌には江朝宗、副統掌には北村隆光が任命されている。

このようにして始まった道院・紅卍字会との提携は、大本教の対外活動に大きな影響を与えた。最も大きな影響として、大本教が中国で宣教する際の活動基盤を獲得した点があげられる。出口王仁三郎は一九二五

年五月二〇日に中国の北京において世界宗教連合会を発足させた。これは中国の悟善社（救世新教）という宗教結社が主催したものであり、同団体の他に道教・仏陀教・回教・仏教・キリスト教の一部が参加した。悟善社は、道院と同じ祭神を奉斎し会員たちも相互に重複し合う、いわば道院・紅卍字会と姉妹関係にある団体であった^⑭。悟善社（救世新教）の中心人物は江朝宗であった。彼は北洋軍閥安徽派の政客であり、袁世凱の下で北洋の三傑と謳われ、一九一三年と一九一七年に北京政府の國務總理をつとめた経歴をもつが、彼もまた道院・紅卍字会の会員であった。先に述べたように一九二四年三月に神戸道院が開設された際、江朝宗が統掌に任命されていることから、出口王仁三郎との関係も深かったと考えられる。またこの時、大本教側からは井上留五郎（後に道院の修方となる。道名・神吉）、道院・紅卍字会からは徐世光、悟善社からは江朝宗が世界宗教連合会の理事に就任している^⑮。

次に注目したいのは、大本教の外郭団体として人類愛善会という団体が組織された点である。北京において世界宗教連合会が発足したちょうど二日前の五月一八日に、神戸道院の中尾晃久が亀岡の出口王仁三郎のもとを訪れ、万国信教愛善会の組織計画を報告した。これを受けて翌一九二五年二月に、各宗教間の融和親睦を図ることを目的に万教信教愛善会が発足された^⑯。これらの運動を契機として、普遍的人類愛の教義を普及・実践するための団体として同年五月に人類愛善会が設立された。人類愛善会の創立目的は、宗教のもつ偏狭さを超えて、各宗教にとらわれずに人類相互の融和と結合を目指すものであった。しかしその創設の経緯を見ると、「道院」宗教団体と「紅卍字会」慈善団体を並立させて布教活動を実践する、道院・紅卍字会の二元的協業体制をモデルにしたと考えられる。実際、その後における大本教と道院・紅卍字会との提携関係は、「大本教―人類愛善会」と「道院―紅卍字会」という二元

的協業体制をもつ組織同士の「合体」として推進されていくのである。

四、三次にわたる東瀛佈道団の派遣

その後、大本教と道院・紅卍字会との提携関係は、一九二九年から三〇年にかけて中国側から三回に及ぶ訪問団が日本へ派遣されたことにより、よりいっそう本格化していった。この時の訪問団のことを道院側では「東瀛佈道団（以下、布道団とする）」と称している。²⁷⁾

第一次布道団は、瀋陽道院と安東道院の修方を中心に総員一八名によつて組織された。団統（団長）は安東道院の王性真²⁸⁾がとめ、済南母院の侯素爽、北京総院の陶道開（中華紅卍字總會副会長）、東北主院（瀋陽道院）の宋永明（東北紅卍字会分会長）が団監として同行した。この時、大本教信者の西島佐一（道名：宣道）と西川那華秀（道名：尋化）が瀋陽道院で瀋陽紅卍字会分会長をつとめており、彼らも同行して通訳に従事した。一行は一九二九年九月一八日（旧暦八月一六日）に奉天（瀋陽）を出発し、約一ヶ月間かけて神戸・綾部・亀岡・名古屋・静岡・東京・日光などを巡回し、一〇月一八日（旧暦九月一六日）に安東に戻ってきた。この時、大本教の本部である綾部に道院の中央主院が設けられた他、日本総院として東京道院が設立された。その際、出口王仁三郎（道名：尋仁）が日本総院の統掌に任命され、出口王仁三郎の妻で大本教第二代教主であった出口澄（道名：承仁）が日本婦女道徳社の社長に任命された。²⁹⁾

この第一次布道団の派遣において、日本の各地で扶乩が開壇され、老祖による神示がもたらされた。その際、次のような注目すべき神示が下されている。

「尋仁（出口王仁三郎を指す…引用者）の全身に漲る和気は一般の信者と

は異なり、その靈光の輝きは常人の倍である。誠に衆生の光明であり、汚濁した世間の導師である。（中略）彼はただ大和の一遇を照らす賢人であるだけでなく、また東亜大陸の先覚者でもある。その悟る所はわずかに東亜一地方の安危と関わるだけでなく、その行方所は実に世界人類や物質世界の平安を定めるに足るものである。（中略）老祖は命じて「尋仁のことを」知らせ、皆が尋仁の修行を以て手本と見なし模範とするように。」（九月三日（旧暦八月二日秋分）、神戸道院における壇訓）³¹⁾

「老祖は適切な時機に合わせて沙壇（扶乩を指す…引用者）によつて神示を与える他に、尋仁に靈を授けて一切のことを広く告げ知らせる。」（九月二五日（旧暦八月二三日）、神戸道院における壇訓）³²⁾

「老祖は、尋仁と〔直接〕靈で接して、万能の智慧を授けて、群衆を導くようにさせる。また、老祖は沙木〔扶乩で使う棒…引用者〕に靈を授けて、間接的に纂職者に靈を顕す。そこで示される真理は同じものであり、異なるものではない。」（九月三〇日（旧暦八月二八日）、亀岡道院における壇訓）³³⁾

これらの神示は、道院側にとつても衝撃的なものであったと思われる。道院の最大の特徴は、扶乩による神示を絶対的なものとみなし、その通りに活動する点にあった。このような扶乩の壇において、出口王仁三郎（尋仁）は扶乩によらなくても老祖の靈に直接接することができることとされ、その言動は道院修道者の手本であると示されたのである。このように日本において開かれた扶乩の壇は、出口王仁三郎の靈能カリスマと指導力を道院側に顕示するものとなった。さらにまた、道院と大本教との関係についても次のような神示が下された。

今日を以て次のように言う。中国の道院は即ち日本の大本、日本の大本は即ち中国の道院である。今や両地方の堅実なる修道者たちは、もう既に互いに結合し合っている。(中略) 紅卍字会と人類愛善会の双方の修道者たちは、同じく一体であると思ふことができる。(中略) 日本の人類愛善会の存在する所は、即ち中国の紅卍字会の存在する所である。中国の紅卍字会の存在する所は、即ち日本の人類愛善会の存在する所である。道院と大本との関係もまたこれと同じである。(中略) 名称は異なると雖も、各々の修道者が相互に親睦して結合し合う心理は、まさに一つなるものである。その一つなることに区別があるわけではない。(中略) このような中国と日本の結合は、広大無辺な世界における吉祥平安の大本を開くものである。(九月三日(旧曆八月二十八日)、亀岡道院における壇訓)⁵⁴⁾

こうして宗教教団としての道院と大本教、および社会慈善団体としての紅卍字会と人類愛善会、これらは全く同一の組織と認められ、ここに大本教と道院・紅卍字会は「合体」ともいえるような提携関係をもつに至ったのである。

さらに注目したいのは、この第一次布道団が帰国する際に、出口王仁三郎夫妻を含む大本信者七名が、道院一行の帰国途に同行して中国へ渡っている点である。その時の様子も『東瀛佈道日記』に詳しく記されている。それによると、出口夫妻を含む一行は、一九二九年一〇月一日(旧曆九月十七日)に奉天に到着した。奉天駅では東北主院(瀋陽道院)の統掌である談国桓がわざわざ出迎えに来たほか、東北地方の十四の紅卍字会の代表者と五百余人の修方たちが参集して盛大に歓迎した。その翌日に出口王仁三郎は東北主会(瀋陽道院)に赴いて会議を行い、次の三つの事柄に合意した。⁵⁵⁾

大本教と道院・紅卍字会との提携

(一) 日本全国に大本瑞祥愛善会の支部が一千余ヶ所あるが、道院を設ける資格を有するものが約五百ヶ所ある。帰国後に漸次道院を設立していく。

(二) 道院の壇訓および紅卍字会誌報、大本愛善の出版物を相互に交換して研鑽に資する。

(三) 奉天の紅卍字会と人類愛善会が共同で方言学社(日本語学塾を指す・引用者)を設立して、今後の日本訪問に備える。

その後、出口夫妻一行は済南母院を代表する侯延爽を帯同して、長春とハルビンに赴き、人類愛善会の支部を視察して熱烈な歓迎を受けた。⁵⁶⁾ こうして中国東北地方を巡回した後、出口夫妻一行は一〇月三〇日に日本へ帰国している。

そして、その後すぐに第二次の布道団が日本へ派遣された。この時は、瀋陽道院の李天真と營口道院の夏穎誠、そして瀋陽道院に所属していた大本教信者の西島佐一(宣道)と西川那華秀(尋化)の四名が派遣された。一行は一九三〇年二月四日(旧曆一月六日)に瀋陽を出発し、二ヶ月間日本各地を巡回した後、同年四月四日(旧曆三月六日)に安東に戻って来た。この時の布道団はたったの四名であったが、老祖の命によって「凶像版」を日本へ運び、亀岡の大本教本部に安置するという重要な任務が課せられていた。一行は同年二月七日(旧曆一月九日)に亀岡へ到着した後、北京総院より賜った道院礼服を出口王仁三郎(尋仁)と出口澄(承仁)夫妻へ贈答した。出口王仁三郎はこの礼服に着替えて、凶像版を恭しく受け取った後、高天閣の正位に安置して礼拝を行っている。⁵⁷⁾

その後、布道団一行は、昨年一〇月に東北主院(瀋陽道院)で出口王仁三郎と直接取り交わした「日本全国にある大本教の支部に道院を五百ヶ所設ける」という計画を実行に移すために、日本各地を巡回することに

した。その際、大本教信者で道院・紅卍字会の会員となった井上留五郎（道名・神吉）が一行の案内役をつとめた。³⁸ 一行は神戸・大阪・京都・亀岡・綾部など関西圏を巡回した後、関東地方と山陰線沿線各地を回り、さらに九州地方と山陽線沿線各地を巡回した。その間、大本教団の宗教施設に併設する形で道院・紅卍字会を次々と設置していった。もし仮に大規模な使節団を編成していたならこれほどの短期間で日本各地を回ることができず、また莫大な費用がかかっていたであろう。第二次布道団はたった四名と非常に規模の小さいものであったが故に、機動力を発揮して効果的に道院を設置していくことが可能となったのである。

このように第二次布道団が日本各地を巡回している途中、第三次の布道団が日本へ派遣されることになった。それは、同年三月八日に京都で宗教博覧会が開催されるということを知った布道団一行が、その旨を北京総院に連絡したところ、道院から代表団を派遣してこの博覧会を参観するようにと、老祖の命が下ったからである。この第三次の布道団は、臨楡道院³⁹の梁惠雨（道名・慈果）を団長として総勢一〇名で構成され、三月一三日（旧暦二月一四日）に瀋陽を出発し、四月二日（旧暦三月四日）に安東に戻って来た。その間、京都で宗教博覧会を参観したほか、神戸・亀岡・綾部・東京などを訪問している。⁴⁰ この時も各地で扶乩の壇が開かれ、その中で次のような注目すべき神示が下された。

運靈（出口日出磨^{ひでまろ}の道名引用者）を日本中央主院の責任宣靈統掌に任命する。（中略）運靈は生来、尋仁の後を継ぐために来た者であり、大同の真理を世界に広く告げ知らせる者である。汝の負う責務は甚だ重い。尋仁は基礎を固める時期をなし、汝は発展布道の時期をなす。基礎固めの時期は困難であると雖も、実際のところ「その道は」容易である。発展進展させることは容易であると雖も、実のところ「その道は」艱

難に満ちている。基礎固めの時期において辛抱強く信仰を固く守れば、後で大いなる発展が可能となる。（中略）汝は既に大道の運化を承け、その靈化を広く明らかにする。これにより、汝は必ず眼光を四海に放ち、大同の神妙な機微を悟って、智慧を群衆に授けるのである。（一九三〇年三月三日（旧暦二月二四日）、綾部における壇訓）⁴¹

この乩訓で「運靈」という道名が授けられた出口日出磨は、大本教第二代教主である出口澄と出口王仁三郎との間に生まれた長女・出口直日（後に第三代教主となる）の婿となった人物である。一九二四年に京都帝国大学を中退した後、一九二八年に出口直日と結婚し、大本教団内において王仁三郎の継承者と目されていた。この乩訓では、道院の老祖も日出磨を王仁三郎の正統なる後継者と認定し、絶大なる評価を与えている。これによって、道院・紅卍字会の修方たちは、王仁三郎を日本における道院の基礎を築く者、日出磨を道院の発展を推進する者と見なすようになった。

このような三次にわたる布道団の派遣を契機として、日本各地に多数の道院が設立された。その際、「道院及び紅卍字会は大本の別院、分院、支部内に併置」し、「道院の神位を大本神のお宮の中に鎮祭し、道院を設置したる時は同時に紅卍字会分会をも新設」することとし、「大本の看板に準じて〇〇道院及び世界紅卍字会〇〇分会の看板を挙ぐる」⁴²こととされた。こうして、大本教の教団施設をそのまま利用する形で道院が設置されていった。道院の神位についても、扶乩の神示によって、葉書位の大さの簡便な神位が大本用として特別に製作されることとなり、それを各支部や分所のお宮の中に大本の御神体と一緒に合祀した。そして礼拝時には、「大本皇大神又の御名至聖先天老祖守り給へ幸へ給へ」と奉唱された。⁴³ こうして、一九三〇年代以降、大本教の教団組織を利用する

形で日本全国に五〇〇ヶ所以上の道院が開設され、大本教と道院・紅卍字会とは「提携という事より一歩進んで合同といふ様」な関係を持つに至ったのである。

五、大本教と道院・紅卍字会との提携理由

それではいったい、創教の経緯も国も異なる二つの宗教団体が、このような「合同」とも言える前代未聞の関係をもつに至ったのは何故なのか。ここではその理由について考えてみたい。まず大本側について見てみると、一九二三年に道院と提携関係を持った直後に出口王仁三郎自身、次のように語っている点に注目したい。すなわち、「中国道院との提携によって、道院の宣伝使としての資格をもつにいたった関係から、宗教の布教には障害がない。そこでまず宗教的に進出するのだ」と述べている。これに関して大本教の機関誌でも、道院との提携当時をふり返った記事で次のように記されている。すなわち、「新興宗教支那道院、世界紅卍字会と合同し、支那、満蒙に於ける宗教宣伝の自由を獲得するに到った。(中略)各国が支那と条約を締結するに当って先づ第一に布教権を獲得し自国の宗教を支那に布教する権利を得たるに反し、当時の我当局者の不明か、日本のみが支那に対して此の布教権がないのである。(中略)然るに吾出口師は容易に之を獲得し、蒙古人支那人の教化に全力を尽して居られる」と説明している。

これと関連して、黒龍会を主管したアジア主義者の内田良平は、中華民国政府が浙江省に建設しつつあった天理教会堂の集会説教、使用の禁止を命じたことを報しながら、次のように述べている。すなわち、「人類愛善会は支那の宗教道院、世界紅卍字会を併合してゐるので是等を通して宣伝も可能だし(中略)今更ながら出口総裁の炯眼には只々驚嘆の外無

い」と述べ、さらに「日本は各国に対し布教権を持たぬが故に支那に対しても精神的の指導結合の手段を有せぬ、米国の如きは教会を通じて今日の排日の鞏固なる基礎をなしてゐる。大本と紅卍字会との合体は日本が孤立せる時に当り隣邦に多数の固き信仰を同ふせる同志を有することの如何に心強きか感ぜずには居られぬ(中略)今日の大国難を救ふものは出口聖師其人である」と述べている。

以上の回顧談から、大本教の出口王仁三郎が中国における布教活動の足がかりとして道院・紅卍字会との提携という手法をとったことがうかがえる。このことはまた、大本教の関心が中国東北部の道院・紅卍字会に集中しており、さらに満州事変が勃発する直前の一九二九年から三〇年にかけて三次に及ぶ布道団の来日によって両者の関係が急速に深められたことから確認できる。これに関して大本側の記録をみると、日本では亀岡本部にて道院事務を統一して行うのに対して、中国側との連絡は「主として奉天に於ける東北主院を通じて、そして本部の済南及び北平の方と交渉」するとしている。さらに、東北主院(瀋陽道院)と日本の道院・紅卍字会との連絡をとるために、大本教信者の西川那華秀(尋化)と井上留五郎(神吉)と北村隆光(尋宗)が共に「日華連歡統監」に任命され、交流の窓口役となっている。こうして、道院の本部である済南母院や北京総院を通じてではなく、東北主院(瀋陽道院)と亀岡本部が直接連絡を取り合つて提携を推し進める形が、大本側の意向によって準備されたのである。

また、三次に及ぶ布道団の派遣に関しても、大本教側から働きかけをしている点が注目される。すなわち一九二九年春に、大本教信者の西島(宣道)が瀋陽道院で乱訓を仰いだ後、安東道院に行つて王性真と直接交渉し、東北主院(瀋陽道院)・大連・長春・營口の各道院と協力して日本の神戸道院で開沙(扶乩の壇を開くこと)を行うように促している。その

一方で、一九二九年五月に人類愛善会奉天支部長の富村順一（道名・循一）が東北主院（瀋陽道院）へ書簡を送り、大本教・人類愛善会と道院・紅卍字会との提携互助を要請している。⁵⁴ ちょうどこの頃は、一九二八年六月四日に張作霖が奉天近郊の京奉線の列車で爆殺される事件が発生し、日本側の東北侵攻が本格化しようとしていた時期であった。このような緊迫した時期において、大本教側から布道団の派遣を要請したのである。このことから、両教団の提携に際しては大本教側がより積極的であったことがうかがえる。またその背景には、日本軍部による東北侵攻に合せて、道院・紅卍字会の組織基盤を利用した中国進出をより迅速に行おうとする大本教側の企図があったと考えられる。

一方、道院・紅卍字会側にも大本教との提携は大きな利点があった。これに関しては、もともと道院・紅卍字会という団体が一種の権益保全集団としての性格を有していた点を考慮しなければならない。これについて大本教側の資料をみると、道院の実態を本音で語った記事が散見されて興味深い。例えば、道院・紅卍字会に入信した最初の大本教信者である北村隆光は、「道院、世界紅卍字会は何と云っても現代支那におけるインテリとブル（ブルジョア…引用者）の団体である」として、上海で開催された道院全国大会の豪勢なブルジョアぶりを報告している。⁵⁵ また、出口王仁三郎自身も新聞記者のインタビュウに対して、「紅卍字会はブルジョアの会でなア、五百円の入会金を取る事になつとる。馬鹿げた話ぢやが、支那人の有産階級は生命財産が保護出来れば宜いので、その保護をする会というても差支ない」と語っている。⁵⁶

また大本教と道院・紅卍字会が提携関係を結んだ時期は、帝国日本が中国東北部への侵攻を始めようとしていた時期であった。このような時代状況に直面して、道院・紅卍字会に所属する有産階級の人士たちは、自分たちの所有する種々の権益を保護するために、日本側勢力との提携

という方策をとった。道院・紅卍字会の会員が大本教側から得た利便の実例を一つ紹介してみよう。すなわち、満州事変勃発直後の一九三二年九月に、出口日出磨が中国東北部を巡教するために安東へ立ち寄った。その際、紅卍字会安東支会長の王性真（第一次東瀛布道団を指揮した団長）は、日本軍が差し押さえていた安東銀行の預金を引き出してもらうように頼んだ。この依頼を受けた出口日出磨は、人類愛善会の安東支部長らを通じて、官憲当局の守備隊長と交渉し、翌日に預金を受け取ることが出来た。⁵⁷ 紙幅の制約上、すべてを紹介することはできないが、大本教側の資料にはこのような事例が多数報告されている。このような事実からも分かる通り、道院・紅卍字会側にとって、大本教は自分たちの権益を維持・保護してくれるための格好の協力相手となったのである。

しかしながら、道院・紅卍字会とは無関係の慈善団体であると見なされてきた。この点に関して、例えば紅卍字会研究の第一人者である孫江も、「道院・紅卍字会は、明確な政治的・民族的意識を持たず、その政治的立場はその時その時の政治的情勢に影響・左右されていた」と述べている。これに対して、戦前に公刊された日本側資料の中に道院・紅卍字会の実態を分析した研究書がある。そこには、「（紅卍字会の）主要な結社員は、地主・大商人・富農・退職官吏・退役軍人からなつて居り、地方政治に幾らかの影響を与へてゐる（中略）紅卍字会は政治的でないと言言してゐるけれども、その要求そのものは、ある意味では政治的となるのである」と述べながら、次のような報告がなされている。⁵⁸

この教団が我国に協調的であるといふのは、我が国の軍事力の滲透してゐる地域といふ条件が存した場合にのみ考へられることであらう。重慶側の政治力の滲透してゐる地域では、この教団は確かに重慶政権によって組織化され反日行動に出てゐるのである。The Chinese Year

Book (1940-41)によれば、旧国民政府の重慶移転以来、紅卍字会は同市に總會を設け、各地の分会の諸事業を調整してゐると出てゐるが、これは蔣政権側がその抗戦陣営の一翼としてこの教団を再組織したことを物語るものである。(中略)この組織を重慶側が活用してゐることは明かである。⁹⁾

つまり、道院・紅卍字会は政治的な色合いを持たないが故に、そのことが逆に当時の政治状況に左右されやすい条件となり、特に道院・紅卍字会の活動を支援してくれる政治勢力に迎合しやすい傾向を生み出したということである。中国東北部で一大勢力を形成していた道院・紅卍字会も、とりわけ親日的な教義・思想を有するというようなものではなかった。しかし、道院・紅卍字会の組織維持と所属会員の権益保護という実利を求めたために、日本側諸勢力と連携していた大本教との提携を積極的に推進していったのである。

おわりに

大本教と道院・紅卍字会との提携理由について、従来の研究では主に二つの理由が考えられてきた。一つは、両教団ともに宇宙を主宰する至高神を信仰対象とし、神懸かりによる「お筆先」あるいは「扶乩」という自動書記術を用いていた点である。二つ目は、両教団が「諸宗教の一致」という教義を掲げていた点である。大本教では、すべての宗教は同じ根本から出てきたとする「万教同根」思想を掲げていた。一方、道院でも、世界の五大宗教は先祖の命によって創り出されたとする「五教同一」思想を掲げていた。このような教義の共通性が両教団の深い提携を生み出したとされてきた。

このような評価がなされたのも、両教団が帝国日本の軍国ファシズムによる被害者となったからでもあった。周知の通り、大本教は一九三五年一〇月に不敬罪および治安維持法違反の嫌疑で大弾圧を受け、教団は壊滅状態に陥った(第二次大本事件)。また道院・紅卍字会も、一九三七年の日中戦争の勃発後、日本軍による軍事侵攻によって大きな被害を受けた。このような「被害者」というイメージが持たれたために、両教団の提携は国家・民族の障壁を乗り越えた東アジアにおける民衆宗教間の協力運動と評価されてきたのである。

しかし実際のところ、両教団の提携は、一九二〇年代から三〇年代における東アジアの複雑な政治情勢の中で、両教団の政治的な利害が合致したために可能となった類似希な現象であったと見なすことができる。当時の中国において、国際法上、欧米列強はキリスト教の布教権を獲得していた。これに対して日本側は、日本人に対する布教活動は可能でも、中国人に対する直接的な布教活動は行えないことになっていた。そのため大本教の出口王仁三郎は、道院・紅卍字会に属する団体として中国内における宗教活動を行うことができる立場を確保しようとしたのである。一方、道院・紅卍字会側も、帝国日本による中国への軍事侵攻という時代状況の中で、大本教との連携は既存の権益を維持・保全するため大いに役立った。このように両教団の提携を促した最大の要因は、教団組織の維持あるいは拡大という実利的な利害関係であった。このような観点からみると、「万教同根」「五教合一」といった「諸宗教一致」の理念は、両教団が抱いた現実的な利益追求という政治的思惑を隠蔽する機能を果たしていたと言えるであろう。

注

① 大本教の沿革に関しては、大本七十年史編纂会『大本七十年史(上・下

- 卷) (宗教法人大本、一九六四年) を参照。
- ② 孫江『近代中国の宗教・結社と権力』(汲古書院、二〇一二年) の第三章「地震の宗教学―紅卍字会と大本教との関係を手がかりとして」(七八〜九八頁) と、孫江「地震の宗教学―一九二三年紅卍字会代表団の震災慰問と大本教」(武内房司編著『越境する近代東アジアの民衆宗教・中国・台湾・香港・ベトナム、そして日本』(明石書店、二〇一一年、八三〜一〇〇頁) 参照。
- ③ 道院・紅卍字会の沿革については、酒井忠夫『近・現代中国における宗教結社の研究』(国書刊行会、二〇〇二年、一五三〜三四二頁) 参照。
- ④ 酒井忠夫、前掲『近・現代中国における宗教結社の研究』一五八〜一九六頁。
- ⑤ 扶乩は扶鸞・扶箕・飛鸞とも呼ばれた。志賀市子『中国のこっくりさん―扶鸞信仰と華人社会』(大修館書店、二〇〇三年)、同「化劫救世」の願い」(野口鐵郎編『結社が描く中国近現代』山川出版社、二〇〇五年、二〇〇頁) 参照。
- ⑥ 「五教合一」論に関しては、宮田義矢「五教合一論初探―道院・世界紅卍字会の教説を例に」(武内房司編著、前掲『越境する近代東アジアの民衆宗教』一八三〜八頁) 参照。
- ⑦ 酒井忠夫、前掲『近・現代中国における宗教結社の研究』一九〇頁。
- ⑧ 紅卍字会は赤十字社をモデルとし、かつ競合団体として創設されたものであった。宮田義矢「世界紅卍字会の慈善観」(武内房司『戦争・災害と近代東アジアの民衆宗教』有志舎、二〇一四年、八九〜九二頁) 参照。
- ⑨ 道院発祥の地である濱県の壇は、後に「宗壇」として管理されることとなったが、交通不便のために天津に移され「天津宗壇」と称された。また、最初に開設された済南道院は「母院」と称され、道院の母胎的聖地として尊崇された。
- ⑩ 道院・紅卍字会に所属した人物として以下の名前があげられている(括弧内は道名を示す)。熊希齡(妙道)、何仲起(素璞)、王芝祥(慧惠)、銭能訓(玄機)、王人文(悟淡)、許蘭洲(德輝)、江朝宗(慧濟)、喬保衡(素包)、王汝勤(靈覺)、盧永祥(道靈)、何豊林(化南)、李慶璋(圓源)、王筱東(性真)、馬龍潭(龍光)、郝景星(靜存)、陳宝龍(慧通)、韓文友(益三)、胡恩光(睿覺)、湯佐輔(弘濟)、梁慶雨(慈果)、林炳華(覺平)、吳佩宇(智立)、蕭耀南、談道桓、李振鈞(智真)、陶席三(道開)、馬文盛(馬鼎)、薩鎮水(善根)、李逢春(化清)、伝道言、孔祥榕(慧航)、宋九齡(永明)、衛興武(止容)、吳性空、謝素定、呂海寰。北村隆光「道院、世界紅卍字会に就て」『神の国』第一五四号、一九三二年一月一日、六八頁。
- ⑪ 「政治に涉らず党派に連せざるを以て要となす」(道院院章) 第三条。酒井忠夫、前掲『近・現代中国における宗教結社の研究』一九二頁。
- ⑫ 宮田義矢、前掲『世界紅卍字会の慈善観』九五頁。
- ⑬ 例えば、『新青年』第四卷第五号(民国七年五月一五日号) に掲載された、陳大齊「關『靈学』」では、当時上海で勢力を拡大していた盛徳壇靈学会が行っていた扶乩について、西洋の「Planchette (プランセット)」や「magic pendulum (魔擺)」の如く、一種の無意識的筋肉運動に過ぎないと批判している(三七三〜四頁)。東亜研究所編『近代支那に於ける宗教結社の研究』(東亜研究所内伊藤斌発行、一九四四年、五一〜二頁) より引用。
- ⑭ 一九二二年より一九二八年までの道院設置の趨勢を見てみると、主として山東・河北・安徽・江蘇の四省で勢いがみられた。そのうち、山東・河北両省に全体の過半数である五四%強が集中していた(東亜研究所編、前掲『近代支那に於ける宗教結社の研究』一三五頁)。このことから、道院の活動が中国北方地域を中心としたものであったことが確認できる。
- ⑮ 大山彦「道院・紅卍字会の研究」(『建国大学研究院』研究期報) 第三輯、一九四〇年五月、四九一〜二頁) 参照。
- ⑯ 一九二九年から三一年までに設立せられた道院数は総計三六ヶ所に及ぶが、その中で最も多いのは遼寧で、熱河がそれに次いだ。また、遼寧・吉林・熱河など東北地方のものは計一八ヶ所で全体の半数を占めた(東亜研究所編、前掲『近代支那に於ける宗教結社の研究』一五五〜六頁)。
- ⑰ 義援金の金額については諸説ある。前掲『大本七十年史(上巻)』では「銀二万元」(七〇二頁) とあるが、紅卍字会側の資料では「五〇〇〇弗」となっているものが多い。
- ⑱ 小田秀人『長期建設と世界紅卍字会の活動』(世界紅卍字会後援会発行、

- 一九三九年六月、三頁)。
- ①⑨ 大本教の資料によると、「道院関係者には直隸派、反直隸派何れも沢山居るが、概して安福派を中心に親日傾向を帯びた人士が最も多数を占めて居る」と報告されている。「道院々報」「神の国」一九二四年一〇月一〇日号、九三頁。
- ②⑩ 林出賢次郎が大本教と道院との接触を仲介した経緯に関しては、孫江、前掲『近代中国の宗教・結社と権力』(七九〜八五頁)と、同「地震の宗教」(前掲『越境する近代東アジアの民衆宗教』八四〜八九頁)に詳しい。
- ③⑪ 侯延爽については、『人類愛善新聞』一九三〇年一月一三日号、第二面「紅卍字会幹部亀岡に永住、東洋平和の促進を期す為」、『人類愛善新聞』一九三一年一月一三日号、第二面「紅卍字会の代表者侯延爽氏濟南へ帰る」参照。
- ④⑫ 「神戸道院開院式に参す」(『神の国』一九二四年三月二五日号、三五〜九頁)、及び同号「道院々報」四五頁。
- ⑤⑬ 悟善社は民国八(一九一九)年に北京での乱壇により開創され、民国一三(一九二四)年に「救世新教」という宗教結社となり、翌年北京政府内務部の批准を得た。錢能訓・段祺瑞・江朝宗・呉佩孚らが所属した。以下、悟善社・救世新教に関しては、酒井忠夫、前掲『近・現代中国における宗教結社の研究』(九一〜一二八頁)参照。
- ⑥⑭ 『瑞祥新聞』一九二七年三月二一日号、第二面「救世の二大経綸、世界宗教連合会」。
- ⑦⑮ 前掲『大本七十年史(上巻)』七六八〜九頁。
- ⑧⑯ 同右、七七〇頁。
- ⑨⑰ 布道団来日の模様は、『東瀛佈道日記』(程妙因・任惟登撰述、一九三二年瀋陽道院編集・発行)に記録されている。本書は戦後に『東瀛佈道日記』(世界紅卍字会台湾省分会、一九七七年五月)として復刻・印刷されている。
- ⑩⑱ 「性真」は道名で、本名は王筱東である。大山彦一の報告によると、彼は東辺実業銀行長をつとめたとされる(大山彦一、前掲『道院・紅卍字会の研究』四九二頁)。
- ⑪⑲ 前掲『東瀛佈道日記』「第一次東瀛佈道日記」三〇〜三二頁。
- ⑫⑳ この時の模様は、「紅卍字会役員亀岡天恩郷に来る」(『真如能光』一九二九年一〇月一五日号、四一頁)に詳述されている。
- ⑬㉑ 「尋仁」団和氣、異於信衆、靈光之瑩、倍於常人、誠衆生之光明、濁海之導師也：是不僅為大和一隅之明哲、亦東亞大陸之先覺者也、以其所悟、非僅繫東亞一方之安危、以其所行、實足以奠世界人類之平安也：g命、着即知母給各職修、共當以仁子之修行、為儀師也」(前掲『東瀛佈道日記』「第一次東瀛佈道要訓」七〜九頁)。訓文中にある「g」は、老祖を意味する道院特有の印である。
- ⑭㉒ 「老人相機沙訓外、尚授靈於仁子、而宣示一切也」(前掲『東瀛佈道日記』「第一次東瀛佈道要訓」一六頁)。
- ⑮㉓ 「老人接靈於仁子、而使其有万能之智慧、以導於群衆、与老人授靈於沙木、間接顯靈於纂職者、其理一而事異也」(前掲『東瀛佈道日記』「第一次東瀛佈道要訓」二九〜三一頁)。
- ⑯㉔ 「故以今日為言、中之道院、即和之大本、和之大本、即中之道院、今者兩隅堅道堅修之士、既有此相結相合之交：中愛兩方之修、視同一體：如是則和之愛善所在、即中会之所在、中之中会所在、亦即和之愛会所在也、至於道院大本、亦如是耳：名称雖異、而各方之相親相睦相合之心理、當一其一而無別也：惟此中和之結合、而啓其大千世界祥安之大本也」(前掲『東瀛佈道日記』「第一次東瀛佈道要訓」三一〜三三頁)。
- ⑰㉕ 前掲『東瀛佈道日記』「第一次東瀛佈道日記」八三頁。
- ⑱㉖ 前掲『東瀛佈道日記』「第一次東瀛佈道日記」八四頁。
- ⑲㉗ 前掲『東瀛佈道日記』「第二次東瀛佈道日記」九三〜九五頁。この時、出口王仁三郎に対して「密訓」が伝達された。この図像版に関しては大本教側でも公開されていない。
- ⑳㉘ 「神吉君由綾部来：以期貫徹両会精神、実行互相提携之趣旨、且言『将来日本全国道院可成立五百余処、而中分会約可八百余処、現已計画就緒、努力工作、此次前往先可成立若干』云々」(前掲『東瀛佈道日記』「第二次東瀛佈道日記」一〇三頁)。
- ㉑㉙ 臨榆は中国の河北省にかつて存在した県であり、現在の秦皇島市海港区海陽鎮一帯に位置する。

- ④① 前掲『東瀛佈道日記』「第三次東瀛佈道日記」一七六～七頁。なお、第三次佈道団については、『真如能光』一九三〇年四月五日号・一五日号・二五日号に詳しく紹介されている。
- ④② 「派遣靈為大和中央主院責任宣靈統掌：運靈生有自来、繼尋仁而佈大同之法要於世界者、汝負責甚重也、然尋仁為固基之時代、汝為展佈之時期、固期也雖難、其至至易、展進也雖易、而其至至艱、因固基之時、堅忍而信守之即可已、開展也：汝既承道運、宣斯靈化、是必當放眼光於四海、以悟大同之妙機、着智慧於人群」(前掲『東瀛佈道日記』「第三次東瀛佈道要訓」八二～三頁)。
- ④③ 池田昭編『大本史料集成Ⅱ…運動篇』(三一書房、一九八二年、二八九頁)。
- ④④ 「道院社会彙報」『真如能光』一九三〇年四月二五日号、五六頁。
- ④⑤ 昭和九(一九三四)年二月一五日の段階で、日本に設けられた道院数は五二ヶ所となったが、この段階で予定数に達したために道院設置はひとまず中断された。前掲『大本七十年史(下巻)』「昭和一〇年一月現在の教勢」二九三頁。
- ④⑥ 「北村隆光宣使の談」『真如能光』一九三〇年四月一五日号、五九頁。
- ④⑦ 前掲『大本七十年史(上巻)』七二〇～一頁。
- ④⑧ 「昭和青年」一九三二年一月号(前掲『大本史料集成Ⅱ…運動篇』四七一頁)。
- ④⑨ 「人類愛善新聞」一九三二年九月三日号、第二面「支那に於ける布教禁止と本会」。
- ④⑩ 「人類愛善新聞」一九三二年一月二三日号、第二面、内田良平氏「讒誣の内に完成せる出口聖師の大偉業」。
- ⑤① 「北村隆光宣使師の談」『真如能光』一九三〇年四月一五日付。
- ⑤② 北村隆光「道院、世界紅十字会に就て」『神の国』第一五四号、一九三二年一月一〇日、八〇頁。
- ⑤③ 前掲『東瀛佈道日記』「第一次東瀛佈道日記」六～七頁。
- ⑤④ 北村隆光「道院成立十二周年記念、立道大会に列して」『神の国』第一六九号、一九三三年二月、三七頁。
- ⑤⑤ 昭和七年八月六日京楽新聞所載記事「大本教の大親分出口王仁三郎氏と素裸禪一つの問答(三)」『壬申日記』卷八、一九三二年二月発行、九八頁。
- ⑤⑥ これに関して、「会員ノ大半ハ有産階級並有識階級ノ人士ニシテ会ハ任意ニヨル寄附金ノ外毎月ニ於ケル会員心分ノ義務的献金ニヨリテ維持セラレアリ既ニ相当ノ基本財産ヲ有スルモノノ」ようであると報告されている。「在哈爾濱総領事八木元人より外務大臣幣原喜重郎宛」昭和五年一月一八日(孫江、前掲『近代中国の宗教・結社と権力』一三三頁)。
- ⑤⑦ 加藤明子「滿蒙の空」『真如の光』一九三二年一月一五日号、二二～三頁。同一一月五日号、二五頁。
- ⑤⑧ 孫江、前掲『近代中国の宗教・結社と権力』一四九頁。
- ⑤⑨ 東亜研究所編、前掲『近代支那に於ける宗教結社の研究』二五〇頁。同右、二五五頁。

(本学文学部教授)